

私たちは「対話」を実践できているのだろうか

哲学探偵（哲学探偵事務所）

本稿では、対話の成立条件と、実際に成立しているかについて私が考えていることを書きまとめました。対話の成立条件は様々あると思いますが、第一に注目すべきことは、「今の目的の共有」と「お互いの協力の意思」と結論しています。

では、以下をお読みください。

1. コミュニケーションの目的？

（1）それぞれの「本来の目的」

まず、言葉によるコミュニケーション全般について概ねの分類から考えてみます。すべての言葉によるコミュニケーションには何かしらの目的があるだろうと考え、それを大別してみました。カッコ内には「本来の目的」と考えられることを入れています。

- ・あいさつ（自身の存在表明、相手の存在確認の表明、敵味方の判別）
- ・おしゃべり、世間話（暇つぶし、雰囲気作り、敵味方の判別）
- ・議論（意見交換、課題解決、合意の創出）
- ・討論（意見交換、競い合い）
- ・説得、交渉（約束の締結）
- ・脅迫（他者のコントロール）
- ・吐露（ストレス発散、救難信号、武装解除）
- ・助言（自己実現、支援）
- ・演説（意見の伝達、誘導）
- ・命令（意見の伝達、強制）
- ・傾聴（他者を理解する、聞いてもらう時間の提供）
- ・自分語り（他者からの承認、自己の正当化）

さらに細かく分類することもできるでしょうし、他にも独立したコミュニケーションスタイルがあるかも知れませんが、主なものは書き出せたように思います。念の為に細かいツッコミに備えておくと、たとえば「あいさつ」の目的を礼儀と書いていないのは、そもそも礼儀の目的は何か？と考えた時にもっと細かく表現できるはずで、その考えたことを書いています。

これらの分類に付記した目的はあくまで「そのコミュニケーションの本来の目的」として考えたものですが、実際のコミュニケーションを見てみると別の目的を感じる事が多くあります。その別の目的とは「自己の利益」であり、多くの場合「自分語り」がそれに当たります。言葉によるコミュニケーションの場は自己表現の機会でもありますから、自分の評価が上がったり、同情を得られたりという期待を持てるものでしょう。

人によってそうしたい気持ちがあることは理解できます。しかし、この目的の違いはコミュニケーションの「本来の目的」を歪めます。たとえば議論する場で、知識のひけらかし・難しい言葉やカタカナ用語・もっともらしい常套句・奇抜な視点・面白いだけの意見などばかりが飛び交ってしまう状況を想像してみると、自慢話や面白いだけの言葉遊びであればおしゃべりと呼んだ方が適切であり、議論とは呼びにくくなってしまいます。自己表現が目的の人物にとっては気分が良いかも知れないですが、議論したい人にとっては意味のない時間になってしまうでしょう。

私は、先に大別したコミュニケーションのいずれにもこの「自己の利益（や自分語り）」が顔を出す場合があり、いつでも「本来の目的」を歪めているように感じています。なぜ、そうになってしまうのか。

ともあれ、もう少し掘り下げてみます。

論考の扉

① 議論と対話の比較

議論と対話は真逆のもののように受け取られることがあります。どちらも「話し合う」ことは共通しています。では、何が違うのでしょうか？

議論という言葉には、言い負かすとか説得するとか、相手との対決の要素が含まれているように感じられるかも知れませんが、しかし、理性的で協力的な議論もあります。議論という言葉の中心にあるのは、単に「主張（論）を持って相談（議）する」ということで、本来の目的としてあげたうちの意見交換がそれに当たると考えています。また、近い言葉に討論もありますが、これも単に「主張（論）を持って問いただす（討）」ということに過ぎません。言葉は異なりますが、概ね似たようなことを意味していると言えるでしょう。

議論や討論では、相手の意見に理解を示すこともあれば、頭ごなしに否定することもあります。議論や討論が対話と異なるように感じられるのは、頭ごなしに否定するような「対話的態度が欠如した状態」が多い印象があるからではないでしょうか。これは本来の目的に、課題解決や合意の創出が含まれているためと考えられます。異なる意見が衝突した時は、解決策や合意が出しにくい状態になります。討論であれば優劣の競い合いがありますので、より対話的態度を欠きやすくなるでしょう。

しかし、議論や討論に常に対話的態度があるとしたらどうでしょうか。印象はまた違ったものになるはずですが、議論や討論が、必ず対話的態度を排除しなければ成立しないものだとすれば、対話的態度を欠くのは当然だろうと思います。ですが、相手の主張をよく聞いたり、疑問を投げかけたり、あるいは自分の意見に矛盾や足りない点がある時に素直に認めたりする態度が維持されることは、議論や討論の「本来の目的」の妨げになるとは考えにくいのです。

このように考えると、本来の目的を妨げ、議論や討論から対話的態度を欠いてしまう原因は「自己の利益」ではないかと思えます。

② 会議やディベートはどうか

会議は、意見の優劣を判断しながら、劣る意見を切り捨てる方法で意思決定することが目的です。議論と大変近い。ディベートは、意見の優劣を競い、より優れた意見を出した側を勝者とするゲームです。こちらは討論と大変近いように思います。

仮に対話的態度を維持しながら参加したとしても、最終的にひとつの意見に決めるために意見が切り捨てられたり、優劣を判断されて勝敗が決したりするのですから、場としては対話的にはなりにくいものでしょう。

『議論と対話の比較』で述べたように、議論や討論がそのまま対話と対立するものにはならないと思いますが、会議やディベートのように本来の目的から対話的になりにくい要素を持っているものも存在することは否定できません。

③ 説得や交渉はどうか

説得は、こちらの意見に相手が賛同するように話すことが目的です。交渉も同じ目的ですが、相手の意見を聞きつつ、相手が納得できる妥協点を探しながら説得するという点が異なります。大きな括りでは、どちらも説得と言ってよいでしょう。

別の言い方をすれば相手の意見をコントロールすることが目的ですから、相手を理解する要素がないように思えます。ですが、相手を一切理解せずに妥協点を探ることはできません。ですから、交渉には対話的な要素が含まれると考えられます。交渉に対話的な要素が含まれないように感じてしまうとしたら、それは相手の意見をコントロールすることを

論考の扉

目的とした説得と同じ目的でありながら、別のコミュニケーション方法である「脅迫」の要素を感じてしまうからではないかと思います。

『会議やディベートはどうか』で述べたように、本来の目的から対話的になりにくい要素を持っているものと混同された場合には、対話的な要素は消えてしまうと考えられます。さらに言えば、これは受け手がどう感じるかの要素が大きいように思います。

④ 命令や相談はどうか

命令は、相手の行動をコントロールすることを目的としています。むしろ、それ以外の目的がありません。相談は、相手の話を聞きながら、よりよい助言をすることを目的としています。

命令には相手の意見を聞く要素がありませんが、相談は相手の意見があって成り立つものです。しかし相談も、「助言によって相手の行動をコントロールする」という使われ方もあるため、対話的要素がありつつも、対話的でなくなる要素も持っていると考えられます。

これも先ほど述べたことと同様に、相手の行動をコントロールするという目的が強くなることによって、対話的要素を感じにくくなるものと考えられます。相談であっても対話的だとは感じられない場合があるとしたら、相手の行動をコントロールしようとする意思が強く出ているからではないでしょうか。

⑤ 発表会と対話会の違い

発表会は、一方的に意見を述べることを目的とする場です。対話会は発表会と異なり、お互いに意見を聞き合うことを目的とする場と言えるでしょう。

ところが、対話会の場であっても発表会のように振る舞う参加者がいま

す。これは「聞いてもらえる場」という点だけをクローズアップして理解してしまい、「聞いてあげる場」でもある点がうまく受け取られていないためだと考えられます。

発表会と対話会はコミュニケーションの方向が異なります。発表会は概ね発言者からの一方向のコミュニケーションであり、対話会は相互に意見を述べ合う双方向のコミュニケーションです。対話会は「話す」と「聞く」を機械的に繰り返す場ではなく、お互いの意見に対して「質問と回答によってより深く理解する」というプロセスがあり、それが本来の目的と言えるでしょう。

(2) 対話と対話でないもの

以上のように、様々なコミュニケーションについて対話的でなくなる原因を探ってみました。本来の目的を離れて自分語りをしたり、他者をコントロールしようとする意思を持ち過ぎたりすることが主な原因だと考えていいでしょう。

しかしながら、それぞれのコミュニケーションに本来の目的があることを考えれば、必ずしも対話的でなければいけないということはないと思います。たとえば命令は、対話的な要素を入れることによって本来の目的が達成できなくなる可能性があります。コミュニケーションの形態は様々あり、対話的だったり対話的でなかったりが混ざり合っているのが実情でしょう。なんのためのコミュニケーションかを考え、適切な方法を選択すればよいことだろうと思います。

本章のはじめに「自己の利益が顔を出し、本来の目的を歪めてしまうのはなぜなのか。」と書きましたが、私は、コミュニケーションの形態と一致しない自分の目的があるためだろうと疑っています。

2. 個人の対話の目的？

論考の扉

(1) 受け容れてもらえる経験

次に、個人の対話の目的について考えてみます。これは、人によって自分の目的は違うとしても、「対話的であること」は多くのコミュニケーションの場で人が求めたい要素だろうという前提に立っています。

では、対話的と呼ばれるためには、どんな要素が必要でしょうか。私がよく耳にしているのは、自由に発言できること、気分的な安全性、否定されないこと、聞いてもらえている感じなどです。これらをルール化している場所もあれば、当然のこととしている場所もありますが、概ねは共通しているように思います。これらを私なりに別の言葉に言い換えると、「私や私の意見を受け容れてくれると感じる」ことと言えるように思います。最近では承認欲求という言葉が目立つようになりましたが、ひとまずはそう言ってもいいでしょう。

とはいえ、他者の意見をなんでもかんでも受け入れるというのもおかしな話で、受け容れられない意見もあって当然です。ですから受け入れることが求められているというよりは、他者の意見に対し「理解しようと努める態度を大切にする」と表現する方が適切でしょう。具体的にいえば、自分が受け容れられないと感じる意見に対しても、いきなり反発や否定をするのではなく、どういう意図があるのか、どうしてそう思うのかを確認しようとする態度やプロセスです。

しかし、表面的にいくらこにこしても、受け容れたくない気持が強いほど対話的になりにくくなるでしょう。内心で「そうじゃない」という気持ちを持っていると、否定的な質問やいじわるな質問が出そうです。もしそういう質問が繰り返されたとしたら「受け容れられた」とは感じないでしょう。

あるいは、自分の意見に引き寄せて自分語りをするきっかけにしてしまう場合もあるかも知れません。せつかくの自分の発言が、別の人

を補強するために使われてしまい、自分の本意とすることがどこかに行ってしまう。あるいは、自分の言いたかったこととはまったく違う主張にすり替えられてしまう。そういう場合も「受け容れられた」とは感じないでしょう。

シンプルに「意見を寸分たがわずに捉える」ことを目的にすることが、より対話的になる態度であり、そのための質問を重ねるプロセスが対話的であると感じさせるように思います。同意するにせよ、同意しないにせよ、正確に把握するように確認しようとするプロセスを経ることは可能なはずですが。仮にこのプロセスを経ることができない人がいるとしたら、はじめから受け容れる選択肢を持っていないのかも知れません。

ともあれ、人は受け容れてもらいたいという意思を持っていて、それを満たすことを対話の目的としている。その面から見た対話の目的は、「受け容れてもらえると感じられるコミュニケーションを経験すること」と考えられます。

(2) 協力と貢献

もうひとつ、別の側面からも考えてみます。人が双方向のコミュニケーションをする時、様々な意見を聞くことも目的のひとつである場合があります。一人の意見より複数の意見、三人寄れば文殊の知恵です。そういう時、いきなり全員が同じ意見だったらどうでしょうか。そういうことはあまりないと思いますが、でももしあったと考えてみると、どうにかして別の意見を探すことになるでしょう。この時の目的が、様々な意見を聞くことだからです。

ではなぜ、様々な意見を聞きたいのか。それは気づきの機会を増やすためでもあり、自分が正しいと決めつけずに考えるためでもあり、多くの人の同意や共感を得るためでもあるでしょう。より信憑性の高い意見にしていくためかも知れません。

論考の扉

もしもその時、お互いの意見を否定しあい、持論の正当性を主張しあうような場であったとしたらどうでしょう。おそらく対話的とは感じられないでしょう。先に述べたように、異なる意見を受け容れる態度を感じにくいでしょう。ですが、本当にそれだけでしょうか。

逆のことを考えてみましょう。

もしもその時、お互いの意見を受け容れ、賛美することを優先し、持論の正当性に執着せず譲り合うことを優先するような場であったとしたらどうでしょう。対話的な感じがしなくもないですが、それで気づきを増やすとかより信憑性の高い意見にしていくことができるでしょうか。お互いに受け容れ合うことだけを大切にし、そのほかのことをまったく問題にしないとしたら、その意見交換にどんな意味があるでしょうか。間違った意見を否定することも、間違った反論にあらがって持論を主張することも、よりよい意見や観点を見つけるためには時に必要なことのように思います。

対話的であろうとし過ぎれば本来の目的と離れたおもねりの場になり、本来の目的を重視し過ぎれば対立ばかりになり、どちらにしても対話的でなくなってしまうそうです。ですが、参加者全員が目的のために協力している場合はどうでしょうか。目的のために協力している場合の「自分の意見」は、それを賛美してもらうことよりもむしろ、よい意見であるかどうかを厳しく吟味してもらった方が参加者全員に貢献できることになります。仮によい意見ではないと判断されたとしても、その場の考えが一步前に進んだのであれば、意味のある参加ができたと感じられるのではないかと思います。

自分の意見に固執するのではなく、参加者全員と協力してよい意見を見つけ出そう、貢献しようとすることも対話的なコミュニケーションに必

要なことのように思います。そしてまた、この協力関係を感じることや、貢献感を得ることも、対話の目的ではないかと考えています。

3. 対話の成立条件を考える

ここまでで、以下のことを考えてきました。

- ・コミュニケーション形態には本来の目的がある
- ・本来の目的にそもそも対話的な要素がない場合もある
- ・本来の目的から離れると対話的になりにくい
- ・本来の目的から離れる原因は自己の利益を優先するため
- ・個人の目的は受け容れてもらえる経験をすること
- ・協力関係と貢献感も個人の目的になり得る

コミュニケーションには様々な形態があり、対話的な要素を排除したものもあり得ます。人が仲良くなるためにはもちろん対話的であった方がいいとは思いますが、仲良くなることより重視したいことがある時には当然違う目的のコミュニケーションがされるものです。その目的がなんであるかを一切考えず、対話的であることだけを要求することや、あるいは対話的でないことでコミュニケーション形態自体を否定することも、対話的ではないように思います。

コミュニケーションが成立する時には、その本来の目的が共有され、協力関係を築きながらお互いに貢献していく姿勢が伴うものではないでしょうか。もし協力関係が築けないコミュニケーション形態だったとしたら、協力関係が築ける形態を提案するのがより対話的だろうと思います。

自分を軽視されたり否定されたりすることは、誰でも嫌なことだと思います。対話的であるということが、軽視や否定とは反対の要素だと考えられるのも理解できます。ですが、軽視や否定ではないものにも拒絶反

論考の扉

応を示して、軽視された、否定だ、対話的でないという意見を耳にすることがあります。そこにはなんとかして協力関係を築こうという意思は感じられず、自分の意見を聞けという対話的ではないものを感じます。対話的ではないというレッテルを貼りさえすれば、相手を批難してよいと考えているようにも見えます。しかしその時、対話的でないのは一体誰なのでしょう。

コミュニケーションには本来の目的があり、もしも対話的になり得るものであったなら、協力関係を築くための提案を試みる。そこには「相手の意見を確認する」というプロセスがあります。このプロセスがないのであれば、誰であろうと、どんな事情であろうと、対話的とは言えないように思います。

対等であることや、双方向のコミュニケーションであることなど、対話の条件は様々に語られており、そのひとつひとつを私も重要だと考えています。相手への尊重もそうですし、自尊心や自制心も重要だと感じています。論理や言葉選びも重要だと感じています。ですが、それだけではない感じもありました。その感じを探って言葉にしてみたのが「コミュニケーションの目的を共有せずに対等になれるのか？」でした。そしてそのコミュニケーションの目的を探っていくと、目的に沿っていない現実が見えてきたのです。

私たちが対話をしているその最中に、本当は何が行われているのか。自分の利益の追求だったり、おもねり、同調圧力、聞いているふりや拒絶だったりしないのか。なんとかしてそれを確かめる方法はないだろうかと考えた先に、「コミュニケーションの目的を共有し協力しあう」ことの重要性にたどり着きました。

対話の成立条件はほかにも様々あるとは思いますが、第一に注目すべきことは、「今の目的の共有」と「お互いの協力の意思」だと考えます。

この観点で観察してみることによって、対話が実践できているか、成立しているかどうか、判断の一助になるでしょう。

今回書きたいことは以上です。

率直な批判・反論に出会えれば幸いです。